

Marketing Conference

エスノメソドロジーとフィールドワーク

—薬害調査における専門的知識と歴史的文脈の意味—

松山大学人文学部

山田 富秋

京都工芸繊維大学

入江信一郎

「生きられた秩序性」を解明する エスノメソドロジー

- エスノメソドロジーの研究対象は、ローカルな場面において自然に組織された日常的諸活動の「生きられた秩序性」である。
- H.ガーフィンケル自身の表現＝ローカルな場面において産出され、自然に説明可能な、生きられた秩序現象(the locally produced, naturally accountable lived phenomenon of order*), Garfinkel, H., and D.L. Wieder, 1992, “Two Incommensurable, Asymmetrically Alternate Technologies of Social Analysis” in Watson, G., and Seiler, R.M. (eds.) Text in Context; Contributions to Ethnomethodology, Sage, pp.187.

道具と結びついた日常的諸活動

- 日常的諸活動の秩序性は「エスノメソドロジー的無関心」を発動させ、「方法の固有性要請(unique adequacy requirement)」を満たすことを通して、「個性原理(haecceity)」の経験的記述として発見される。
- 日常的諸活動とは、「いま語られているワークの生きられた、その場の道具と結びついた進行過程(the lived equipmentally affiliated in vivo in-courseness of the work that is being spoken of)ibid,.1992,p.187」である。このequipmentがハイデッガーを参照している。

個性原理の経験的記述

- 個性原理＝「メンバーのコンピタンス」を通して、その場でものごとが組織される独特の様式
- メンバーは当該現象の内部から、メンバーのコンピタンスを通して、互いに見て取れるような(witnessably)やり方で、ものごとを観察可能で説明可能(accountable)な独特の仕方
で組織化している
- エスノメソドロジストは、「生きられた現象」の独特の様式を
厳密に再現するようなやり方で経験的に記述しなければならない＝「方法の固有性要請(unique adequacy requirement)」という研究方針

方法の固有性要請の 弱い使い方と強い使い方

- 弱い使い方: 日常生活者であれば自然に獲得している世俗的コンピタンスであり、エスノメソドロジストもまた当該秩序をその場で作り出し、自然に説明できる世俗的能力を獲得している。例 日常会話
- 強い使い方: コンピタンス獲得には、意図的で長期間にわたるフィールドワークが必要である。A.ロルズは、以下でサドナウのようにプロのミュージシャンになった例、そしてビットナーの警察署でのフィールドワークの例を挙げる。
(Garfinkel.2002, Ethnomethodology's Program : Working Out Durkheim's Aphorism, Rowman & Littlefieldpp.6-7)

固有性要請の弱い使い方

- これまでガーフィンケルと、彼に導かれた相互行為分析/会話分析が解明しようとしたのは、固有性要請の弱い使い方限定されていたと言える。
- その根拠は、ガーフィンケル自身が日常的諸活動の秩序性をハイデッガー的トラブルメーカーの導入によって明らかにできると述べているからだ。
- したがって、ハイデッガー的な道具的存在性の解明は日常的コンピタンスである「端的な理解可能性」の水準にとどまる。

ハイデッガー的トラブルメーカー

- 道具は使用中には透明性を獲得し、端的に不可視である。そこで、病気や障害といったハイデッガー的なトラブルメーカーを当該状況に導入することで、道具の透明性は克服され、ローカルなワークの組織的秩序が明らかにされる(Garinkel,2002,126)
- ハイデッガー;道具的存在性;Zuhandenheit 何かに従事し何かを使用する、世界へと没入したふるまい全体
- 世界を客観として認識する存在様式は、じつは日常的な世界内存在の例外状態であり、日常的な世界内存在のはたらきが停止してしまった故障状態である

ドレイファスのハイデッガー解釈

- ハイデッガーの新しいアプローチの根底にあるのは、「心抜きの(mindless)」日常的対処技術(everyday coping skills)の現象学であって、この技術こそあらゆる理解可能性の基礎なのである(Dreyfus 1991)
- Dreyfus, H.L., 1991, Being-in-the-World, MIT Press., 2000, 門脇俊介, 貫成人, 轟孝夫, 榊原哲也, 森一郎訳『世界内存在』産業図書
- ドレイファスは技能の現象学として、エスノメソドロジーを誉める。

弱い使い方の限界

- ハイデッガーは『存在と時間』の中で、技能的な知として働く道具的存在者への配慮と、他の現存在(人間)に対する気遣い、つまり共同存在における他者把握とがまったく違うものであると主張する。
- ハイデッガーが描く日常的な他者把握は、平均化され匿名化された世人(das Man)の支配の状態であり、そこで現存在は平均性、均等性、存在免責、迎合といった類型化された「世人というありさまで存在している」(『存在と時間』H.s.129)のである。

ドレイファスの逡巡

- 「しかしハイデッガーはなぜ、日常的生活においては理解可能性が曇らされていると述べて、どんな理解可能性であれ一切の物事が理解可能性を得るのは公共的な実践においてなのだ、と述べないのだろうか。より高次の理解可能性が存在するのだろうか」(ドレイファス邦訳, 2000,178頁)
- 私は、通常的行為の仕方によって端的に可能になる理解可能性よりも、より高次の理解可能性があることを否定していた点で、間違えていたのであった。(同上邦訳、日本語版序文 24頁)

方法の固有性要請の強い使い方 としてのフィールドワーク

- 「現存在が世界を自分の眼で発見し熟察したり、また現存在が自己の本来的存在をおのれ自身に開示しようとするときには、このような「世界」の発見と現存在の開示は、現存在が自分を自分自身から閉め切るために用いてきたさまざまな蔽塞や不明化の一掃として、さまざまな歪曲の打破という形でおこなわれるのが常である」(『存在と時間』H.s.129,細谷訳)。

世人の支配を打ち破る

- 世人による支配の状態→社会学者が調査を開始した当初に立ちはだかる、匿名的で平均化された類型的理解
- 薬害エイズ事件調査の当初→メディアによって表象された類型的な理解に支配されていた
- 第一次報告書の失敗の後の調査の再構築は、世人による類型的な支配を脱するための困難なですが「さまざまな歪曲の打破(ハイデッカー)」であった

輸入製剤によるHIV感染問題 調査研究委員会

- 目的:メディアを通して悪者とされ、長い間沈黙を強いられてきた医師たちの声が聞きたい。
- エイズの危険性を過小評価し、責任逃れを繰り返す役人、薬価差益を目当てに危険な非加熱製剤を売る利益優先の企業、患者を死に至らしめ人生を台なしにしながら、薬害エイズ訴訟の被告席に着くことはなかった医師(『薬害エイズ』毎日新聞社会部,1996)

メディアによって作られた世人

- 薬害エイズ事件の報道から研究者も自由になれない。その結果、2003年の第一次報告書は対象者の医師たちだけでなく、被害者自身からも拒絶され、調査が一時頓挫した。調査体制を変えて、ようやく継続できた。
- 振り返ってみれば、私たちは調査当初、対象者を被害者と加害者という匿名化された世人としてしか把握していなかった。

メディアに支配されたインタビュー

- 米国由来の非加熱製剤の安全性が疑われ始めた時に、この製剤の使用をただちに中止し、以前のクリオに戻すべきだったのではないか？
- 私たちの第一次調査班は、医師・製薬会社・患者が一体となって、血友病と血友病性障害から脱却しようとしたため、エイズの危険性を過小評価したのではないかと仮説を立てた。

血液製剤に対するH氏の思い

- H: 正直ね、あの関節の痛みを除去する薬で命をとられたとしても、あの痛みを耐えるのとどっちがええっていったら、それはねえ、あの当時、じゃあ我慢したか言われたら、たぶん無理かない。
- ** : ただ先ほどの、AHFで十分だったんですよ。
- H: ですからそれがね、そのあとの高濃縮製剤って、それだけ性能があつたにも関わらず、そこまで劇的に効いたという感覚がなかったんで。

薬があったから生きてこられた

- H: ええええ。今の話とちょっと繋げていきたいと思うんですけど、実は前のインタビューのあとに、どうしても伝えきれてなかったっていう思いがあったのがその、血友病の痛み。
- ** : ああああ。
- H: これがわかってもらえないと、伝わらないのじゃないかと。どんなに薬害エイズとは何だったのかという研究いうか、調査をしても、その時になぜ医師は注射をやめなかったのか、母、親とか患者はどうだったのかっていうような、今、なんか質問された製薬会社に対しての恨みとか、厚労省にしてもそうなんですけど。やはりあの痛みを経験して、唯一の治す薬という思いがあって、ですからたとえそのHIVに感染したとはいえ、特に自分の話をすると、ここまであの薬があったから生きてこられたんじゃないか。

メディアの語りによって 覆い隠されていたこと

- メディアは新しいスキャンダラスなHIV/AIDSについて大々的に取り上げるが、血友病それ自体の苦しみについては取り上げない。
- 実際に血友病を生き延びた患者の中には、たとえHIVに感染したとはいえ、血液製剤があったから、ここまで生きてこれたと感じた人もいた。
- 世人の支配を打ち破るためには、方法の固有性要請の強い使い方を採用したフィールドワークが必要になる。